

実践報告

## 日本語教師交換プログラムの実施を通して見えてきたもの — 三重大学とハイデルベルク大学における日本語教育の現状と課題 —

松岡知津子・中広 美江

### Insights gained through the participation in the Japanese language teacher exchange programme: Current Status and Task of Japanese language education at Mie University and Heidelberg University

MATSUOKA Chizuko, NAKAHIRO Mie

〈Abstract〉

This report examines the practice and challenges of Japanese language education as revealed by the Japanese language teacher exchange programme organised between April and September 2016 by our university and Heidelberg University, Germany. First, the study found that the main activity of the heads of the Japanese education departments at both participant Universities is Japanese language teaching. Second, a survey of the colleagues working at both universities revealed their impressions, the challenges they faced etc. The study then deals with challenges and possibilities regarding sending and receiving overseas students.

#### 1. はじめに

文部科学省ほか関係省庁が2008年に策定した「留学生30万人計画」により、三重大学においても、留学生は年々増加の一途をたどっている。なかでも、海外の交流協定校からの交換留学生については、1999年において4名であったのが、2016年には134名へと伸びている。その後も交換留学生の数は徐々に増加していき、受け入れ当初は全体の留学生230名に占める交換留学生の割合は17人と、全体の1割に満たなかったのに対し、2016年においては、293名中134人と全体の半数近くを占めるに至っている。

これまでの三重大学から海外の協定大学への留学生の派遣および受け入れについて見ると、派遣の累計に関しては、ドイツへの29名がもっとも多く、続いて中国17名、韓国15名、スウェーデン10名、台湾10名となっている。そして受け入れに関しては、中国の交流協定校からの累計378名を筆頭に、ドイツ103名、韓国98名、タイ76名、フランス37名となっており、受け入れに関しても派遣に関しても、三重大学にとってはドイツの交流協定校と密接な関係にあることが分かる。

このように、増加の一途をたどる留学生に対して日本語教育を担当する日本語教師は、

留学生の多様化に対応することが望まれる。すなわち、それぞれの異なった学習背景や学習スタイル、学習目的を持つ留学生のことを考慮した日本語教育を行うことが必要となってくる。

一方、ハイデルベルク大学から見れば、留学先である日本の大学で、どのような教育が行われており、実際に日本語の授業に出席してどうだったかといったことは、日本での受入大学のパンフレットやホームページを見たり、留学を終えた学生に提出を義務付けている 3~4 ページの報告書を読んだりすることでしか知ることができない。

他の日本語教育機関の現状については、話や書籍からだけでは理解の及ばないこともある。それは、聞き手にその文脈が体験としてないからであろう。現場には、話を聞いても文書で読んでも分からない背景や事情が存在している。同じ教育機関で教えていると、そこでの日本語教育に囚われることもある。それは、教育機関ごとの背景や実状を承知していればこそではあるが、改善の妨げとなることもある。自らの所属する日本語教育のあり方が現状のようであることには理由があり、それを承知していればいるほど、それに囚われもし、客観的な目で見つめ直して改善していくことは難しい。そこで、両大学の現状を客観的に把握し直し、課題を明確にして、よりよい日本語教育を実践するためには、長年慣れ親しんだ職場を離れ、一度外から見つめ直すことが最も効果的な方法ではないかと考えた。

三重大学では、さまざまな母語を背景とする海外の交流協定校からの留学生に対する日本語教育を行っており、ハイデルベルク大学は日本学を専攻する基本的にドイツ語を母語とする学生を対象に日本語教育を行っている。

今回、三重大学とハイデルベルク大学の教師交換が実現したことで、半年という限られた時間ではあるが、他校の日本語教育の現場に身を置いてさまざまな気づきを得ることができた。三重大学でもハイデルベルク大学でも、日本語を教えることには変わらないが、これまでとは異なる環境と条件下で教鞭を執ることになり、異文化体験と呼んでもよい経験をすることができたといえる。

以下は、この教師交換の実践を記録し、報告するものである。

## 2. 交換の枠組みと業務内容

交換して教師を派遣するにあたり、両校の教員（以下、双方の教員をまとめて「交換教師」と呼ぶことにする。）は「研究休暇制度」を利用した。研究休暇の期間は 2016 年 4 月 1 日から 9 月 30 日までである。ただし、事前打ち合わせおよび引き継ぎのため、三重大学教員が 3 月中旬に渡独した。そして、ハイデルベルク大学教員が来日する 3 月下旬まで両校の日本語教育事情についてのオリエンテーションおよび担当授業科目についての引き

継ぎ等を行った。ドイツで引き継ぎを行った理由は、ハイデルベルク大学教員が日本人であり、日本で就労するために特別な許可を必要としなかったのに対し、本学教員は現地で就労ビザを取得する必要があったためである。

三重大学教員のハイデルベルク大学における身分は「招聘教授」、ハイデルベルク大学教員の本学における身分は「准教授」であった。宿舎に関しては、双方とも大学の宿舎を利用し、また、それぞれには個別の研究室が与えられた。

授業やそれに付随する業務、管理運営等についてまとめたものを、以下に示す。

表 1 交換教員が行った主な業務

	三重大学	ハイデルベルク大学
授業	生活日本語 1 A、集中総合 A、中級 1 文法読解、中級 2 読解作文、上級総合日本語 1 A、日本語日本文化演習 A	現代日本語 2、グループ練習 2、グループ練習 4、現代日本語 5、現代日本語上級
授業に付随する業務	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語教育コースコーディネーター</li> <li>日本語日本文化研修生コーディネーター</li> <li>担当留学生および日本語日本文化研修生の指導と論文集</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>試験問題作成と実施、評価</li> <li>成績開示</li> </ul>
委員会	<ul style="list-style-type: none"> <li>国際交流センター運営会議</li> <li>留学生委員会（陪席）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学期 2 回のスタッフ会議</li> </ul>
学内行事等	<ul style="list-style-type: none"> <li>留学生研修旅行引率</li> <li>盆踊り大会のサポート</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>全学期生対象の新学期オリエンテーション</li> <li>学生自治会主催の夏祭り</li> <li>日本人留学生受入業務</li> </ul>

基本的には、双方の所属先で本来行っていた業務をそのまま交換して行うこととしたが、機関の意思決定に関わるような委員会への参加等は代替りの教員が行なった。

### 3. 日本語授業について

#### 3.1. 三重大学の場合

三重大学では、1997年に学内共同教育研究施設として留学生センターが設立された。その後、2005年に改組が行なわれ、国際交流センターに名を改めた。国際交流センターでは、国際的な研究の推進、地域の国際化、留学生のための生活および就学上の指導助言などのほかに留学生のための日本語・日本文化の教育、日本での生活および就学上の指導助言なども行なってきた。国際交流センターで日本語科目を受講できる留学生は、正規学部生、大学院生の他、交換留学生や研究生といった短期留学生、科目等履修生などである。受講生の日本語学習目的と目標到達レベル、受講の義務についてはさまざまであり、出身大学で日本語を専門としていた者もいれば、医学部や生物資源学部、工学部学生のように

研究の合間に日本語学習を行なう者もいる。三重大学では、これら留学生のための個別のコースは準備されておらず、初級集中コースを除くすべてのコースが学習者の日本語レベルによって分けられ、受講可能な日本語クラスを受ける仕組みとなっている。

表 2 三重大学における日本語科目とレベル

コース名	開講科目名	コースの目標	合格条件
初級集中	集中文法 (6 コマ) 集中総合 (1 コマ)	日常生活における基礎的な文法理解力、読解力、会話力、聴解力の習得	出席 3 分の 2 以上 総合点 6 割以上
基礎 1	生活日本語 1 (1 コマ) 生活日本語 2 (1 コマ)	日常生活に最低限必要な、初歩的な日本語能力の習得	出席 3 分の 2 以上 総合点 6 割以上
基礎 2	生活日本語 3 (1 コマ) 生活日本語 4 (1 コマ) 生活日本語 5 (1 コマ)	初級基礎 1 が終わった後の基本的な日本語力の習得	出席 3 分の 2 以上 総合点 6 割以上
中級 1	文法読解 (1 コマ) 読解作文 (1 コマ) 聴解 (1 コマ) 会話 (1 コマ)	初級の基礎力の上の中級で必要な読解力および聴解力、文章表現力などの習得 4 技能(読む、書く、聞く、話す)の総合的なレベルの向上を図り、中級 2、上級へとつなぐ	出席 3 分の 2 以上 総合点 6 割以上
中級 2	読解・作文 (1 コマ) 文法・読解 (1 コマ) 聴解・会話 (1 コマ)	上級に向けた、読解力、聴解力、会話力、文章表現能力の習得	出席 3 分の 2 以上 総合点 6 割以上
上級	総合日本語 1 総合日本語 2	専門分野で研究を行なうために必要な、高度な日本語力の習得	出席 3 分の 2 以上 総合点 6 割以上

国際交流センターで日本語を学ぶ留学生数は、年々増加しており、2016 年度後期 10 月現在では、152 名が国際交流センターで日本語授業を履修していることになる。これは三重大学の全留学生のおよそ半数を占めている。

表 3 国際交流センターにおける日本語学習者数の推移

年度	前期	後期	全体数
2010 年	71	71	220
2011 年	65	88	239
2012 年	100	105	251
2013 年	119	127	278
2014 年	122	144	286
2015 年	121	144	312
2016 年	125	152	293

また、2016年10月現在、三重大学国際交流センターで日本語を学ぶ学習者の国籍は、中国からの60人を筆頭に、ドイツ12名、インドネシア12名、台湾10名、タイとベトナムがそれぞれ8名ずつとなっており、合計23カ国からの学習者合計142名が学んでいる。

### 3.2. ハイデルベルク大学の場合

ハイデルベルク大学は、1386年に創立されたドイツ国内最古の大学である。学生数約31,500人の州立の総合大学（工学部を除く）で、日本学科は1985年に開設された。当初の修了学位はマギスター（Magister）、すなわち学士なしの修士だったが、1999年のボローニャ宣言による大学改革に沿って、2004/05年冬学期から学士課程（3年間）と修士課程（2年間）が導入され、現在に至る。

日本学科は中国学科、東洋美術史学科と共に東アジア研究所を構成している。東アジア研究の中の重点科目としての日本学は、主専攻として学士課程必要全単位の75%、第二主専攻として50%、副専攻として25%（言語あり、言語なしの2種類）の選択が可能である。2014年現在、日本学の学士課程には主専攻・副専攻合わせて約290名の学生が在籍している。これは、東アジア研究を専攻する学生の57%に相当する。

日本学の学士課程における具体的な履修項目は、次のとおりである。まず初めの2年間（4学期間）で現代日本語の基礎を身につける。それと並んで、基礎演習で、東アジアの国々の社会、歴史、文化に関する基礎知識と、日本におけるそれを学ぶ。現代日本語のみならず古文も必修で、漢文の授業も選択科目として提供されている。4学期間の基礎課程が終わると、学生はそれぞれの興味と関心に応じて、文化・文学、社会・歴史のいずれかの専門分野を選び、日本への理解を深める。また、本学では専攻科目を超えた関心・興味を満たすさまざまな授業の履修を奨励している。日本学の日本語教育部門においては研究のために必要な能力を身に付けさせることを最終的な目標としている。研究に必須な能力とは、新聞や専門の文献、文学や歴史の原典などがある程度辞書の助けを借りながら読み、理解したことを口頭でも記述でも要約できる言語能力のことであり、具体的に言えば、講義や意見を聴き、質問し、自分の意見を言い、討論できることである。現代日本語1（1学期目）の授業は初心者を対象とする週18時間（実質13.5時間）の集中講座であることが特徴である。授業の内訳は、一般授業が14時間（実質10.5時間）、ドイツ語による文法解説・翻訳練習が2時間（実質1.5時間）、書き漢字練習が2時間（実質1.5時間）である。特に漢字語彙の学習に力を入れており、この書き漢字練習の授業は現代日本語1と2の2学期間にわたって行われている。

1学期から4学期までの現代日本語の一般授業では、自主制作教科書、中広美江・高橋雪絵共著『トピック別現代日本語1』ならびに飯島昭治著『場面による実際の日本語2・3』

を使って、語彙、表現、会話、読解、聴解、文字、文法、作文、その他総合的に学習する。ドイツ語による文法解説・翻訳練習はドイツ人講師が行い、それ以外の授業は日本語講師が行なっている。5 学期になると、学習者向けの教材を離れて、高等学校の『現代社会』からいくつかの社会的なテーマを選び、内容に関する読解とディスカッションを中心とした授業を行なっている。

学期ごとの到達目標は、1 学期：A 1～A 2.1、2 学期：A 2.1～A 2.2/B 1 の入り口、3 学期：B 1 の入り口～B 1.1、4 学期：B 1.1～B 1.2、5 学期：B 1.2～B 2.1 となっている。ただし、4 学期修了後に半年ないし 1 年間の留学を奨励しており、半数近くの学生が留学をしている。4 学期修了後に留学をした場合、留学後に 5 学期の授業を受けることになっている。

表 4 ハイデルベルク大学における日本語教育の開講科目

	開講授業とコマ数	開講学期	合格条件
モジュール 1	現代日本語 1 (9 コマ)	冬	筆記②口述③書き漢字の試験でそれぞれ 50%以上であること
	現代日本語 2 (5.5 コマ)	夏	
モジュール 2	現代日本語 3 (4.5 コマ)	冬	
	現代日本語 4 (4.5 コマ)	夏	
モジュール 3	現代日本語 5 (4 コマ)	冬・夏	①筆記②口述の試験でそれぞれ 50%以上であること、JLPT N 2 及び N 1 との互換可能
選択 (BA)／選択必修 (MA)	現代日本語上級 (2 コマ)	冬・夏	発表のほか、筆記試験で 50%以上であること

表 5 ハイデルベルク大学における学期別授業参加数

年度 <sup>1</sup>	学期 <sup>2</sup>	合計	現代日本語					
			1	2	3	4	5	6
2011 年	冬学期 10/11	158	79		50		29	
	夏学期 11	121		67		40		14
2012 年	冬学期 11/12	167	87		58		22	
	夏学期 12	155		79		53		23
2013 年	冬学期 12/13	175	93		59		23	
	夏学期 13	142		82		43		17
2014 年	冬学期 13/14	177	90		63		24	
	夏学期 14	137		79		48		10
2015 年	冬学期 14/15	144	66		50		28	
	夏学期 15	102		51		41	10	
2016 年	冬学期 15/16	126	57		43		26	
	夏学期 16	86		33		41	12	

上記の表 5 の人数はそれぞれの授業に 30%以上出席した学生の数である。なお、カリキュラムの変更に伴い、2014/15 年冬学期から「現代日本語 6」は廃止した。

上述したように、ハイデルベルク大学の日本学専攻の学生は、4 学期が終わった段階で半年ないしは 1 年間日本に留学する場合がほとんどである。現在、日本の協定大学は 11 校あり、毎年 25 名前後の学生を派遣している<sup>3</sup>。

### 3.3. 交換教師が担当した授業について

3.1.および 3.2.からも分かるとおり、両大学の日本語教育事情を比較すると、同じ日本語教育とはいえ、その位置づけや目的、システムなどさまざまな面において異なっていることがわかる。そのため、教員交換を行うためには綿密な打ち合わせと引き継ぎを行うことが必要であった。また、実際にそれぞれの授業が始まってからも、不明な点や悩みなどが出てくることも少なくなく、その度にメールや音声通話ソフトを利用して相談を行うこともあった。

それでは、以下では、交換教員が担当した授業について見ていく。

表 6 交換教員が三重大で担当した授業

授 業 名	受講者数	時間数/週	チームティーチング	授業についての説明
生活日本語 1	12	2	○	文法、会話 『みんなの日本語 1』
集中総合	7	2	○	文法、作文、総合 『みんなの日本語 1』
中級 1 文法読解 A	33	2	×	文法読解 『みんなの日本語中級 1』
中級 2 読解作文 A	39	2	×	読解作文 上級学習者のための日本語 読解ワークブック
上級総合日本語 1 A	22	2	×	アカデミック日本語 プリント
日本語日本文化演習 A	2	2	×	論文作成
合 計		12 時間		

三重大国際交流センターの日本語科目については、すでにコースデザインからシラバスまで詳細な情報が冊子の形で公開されており、基本的には授業はそれに沿って進めればよいようになっていた。実際の授業でも、すでにある補助プリントを活用し、試験もこれまでのやり方を踏襲するようにした。チームティーチングでは、チームのメンバーから授

業での学生の様子を聞いたり、こちらがわからないことについて教わったり相談したりしながら授業を行った。また、授業で配布する資料が事前にコピーされており、準備時間の短縮になった。どのレベルの授業も直接法によった。

ハイデルベルク大学教員が今回初めて経験したのは、「日本語日本文化演習 A」と呼ばれる論文指導の授業である。これは日本語・日本文化研修留学生が「アカデミックな文章を書くための基礎的方法を学び、自分の研究内容を『研究レポート』としてまとめ、口頭発表する力をつける」ための授業で、半年間指導を受けた学生 2 名の残り半年の指導を引き継いだ。

表 7 交換教員がハイデルベルク大学で行なった授業

授 業 名	受講者数	時間数/週	チームティーチング	授業内容
現代日本語 2	12	6	○	2 学期の学生が受ける総合授業 自主制作教科書『場面による実践的日本語 2』
グループ練習 2	7	2	×	会話授業 (45 分間) 適宜、プリント活用
グループ練習 4	10	2	×	会話授業 (45 分間) 自由なテーマでプレゼンテーション
現代日本語 5	12	4	×	総合授業。高等学校教科書『現代社会』抜粋
上級	13	2	×	文法・新聞購読
合 計	16 時間			

ハイデルベルク大学では、「現代日本語 2」は、2016 年夏学期において 3 クラスが同じ日の同じ時間帯に行われていた。コーディネーターの専任教員が、次の授業で行うべき内容と教材などについて準備し、前日に行われる引き継ぎの際に指示を出すことになっていた。チームティーチングを行わない「現代日本語 5」および「上級」に関しては、「現代日本語 5」は、授業の趣旨である「日本人向けに書かれた社会科教材を使用すること」ということ、「上級」に関しては「新聞購読を行い、学生が発表する」ということは踏襲し、授業の方法や副教材の使用、授業の進め方といった詳細については教員の裁量で行うこととした。

このように、三重大学における教育もハイデルベルク大学における教育も、教材や内容、大きな流れといった点においては基本的に踏襲することとした。そして、授業記録であるが、両大学とも科目ごとのファイルに手書きで記入し、授業担当者は誰でもいつでも見られるようになっていた。ただし、ハイデルベルク大学の場合は、報告書に記載するだけで

なく、チームティーチングをする授業の場合はさらに口頭での引き継ぎと2週間ごとに出される授業計画表の微調整・再検討も行われていた。

授業と関連することとして、評価方法の違いについても触れておきたい。三重大学国際交流センターの日本語授業では、評価に出席率や課題の提出率を加味することがあるが、ハイデルベルク大学の日本語授業では出席率や課題の提出については評価に含めない。

## 4. 交換プログラムを実施して

### 4.1. 関係者の立場から

ところで、ハイデルベルク大学日本学科の学科長と副学科長および三重大学の専任教員は2016年4月から同年9月までの半年間をどのように見ているのだろうか。日本語教師交換プログラムを振り返って、その意義と初めての交換を終えての印象を尋ねた。ここではいくつかの点に絞って言及する。ドイツ語で得られた回答については、筆者が意識したものを記す。

まず、ハイデルベルク側は、ドイツ語に精通しており、ドイツ人学習者が間違いやすいポイントなどを熟知した経験ある教員を半年間失うことについての懸念があったものの、この事業を推進した。その理由について、言語教育には継続性が重要であるが、授業を成功させるためには「変化」も貢献するからだとしている。また、組織としてスタッフの専門能力向上のための勉強の機会を積極的に与えることに尽力していることから、この教師交換は6か月という制約はあるものの日本の大学で正規職員として働くという本物の仕事の形をとるものであり、これほどの好機はないとも述べている。その上、ドイツでの教授歴が長い日本人スタッフが日本語教師としてさらに成長していくためには、日本の日本語教育機関との交流を育み深めていくことが大切だとしている。言葉というものは生き物であり、変化がつきものである。そのようなことから、日本人であっても一定期間の日本滞在は不可欠であると考えている。この教師交換事業への期待として述べていることは、同じ日本語教育とはいえ、ハイデルベルク大学の教師が日本でする経験は、母語の異なる学習者への教育であり、ドイツでの教育環境とは大きく異なるため、そのような新しい体験をして戻ってきた教師がハイデルベルク大学の日本語教育に新風を吹き込んでくれることである。

次に、受け入れる側の立場に立って見た場合はどうであろうか。交換を終えての印象として挙げられたのは、ハイデルベルク大学の学生が、三重大学から迎えた教師によって新しい授業のスタイルを経験し、日本語に対する視野を広げることができたということである。また、三重大学の日本語教師にとってドイツで教えることのメリットの一つは、将来受け入れる留学生のニーズを把握できることだとしている。海外における言語教育の現場

を見ることは、日本で留学生の要望に沿った授業を提供し、教育内容を最適化しようとする際の助けになるであろうことにも触れている。

一方、三重大学では、本プログラムによる交換教員は教育には貢献度が高かったが、現場における管理・運営においては残された教員の負担が大きかったとの指摘もある。今後の本プログラムについては多くの教員に公平にその機会が与えられ、現場を重んじた教員互換システムで交流が行われることが期待されている<sup>4</sup>。

総括すると、残された教員への負担もあるが、この日本語教師交換プログラムによって両校ともに利益を受けており、今後も継続が望まれるとしている。

#### 4. 2. 日本語教員へのアンケート結果から

本節では、交換した教員とチームティーチングで授業を行った両校の日本語教員に、交換した教員との授業外での交流状況およびそれぞれの日本語教育に及ぼしたかを知るために、アンケート調査を行った。その結果を以下に記す。調査対象は、三重大学国際交流センター日本語非常勤講師 3 名と、ハイデルベルク大学日本語専任講師 2 名である。調査はメールで行い、適宜口頭でもインタビューを行った。調査の時期は、2016 年 10 月であった。調査項目は以下のとおりである。

表 8 日本語教員に対するアンケートの質問内容

- |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ol style="list-style-type: none"><li>(1) 三重大学／ハイデルベルク大学の教員と話をするチャンスはどのくらいありましたか。<br/>(例：一週間に／1 日に○時間程度)</li><li>(2) 三重大学の教員と一緒に仕事をすることで三重大学（または日本）・ハイデルベルク大学（またはドイツ）の教育事情や制度などについて、理解が深まりましたか。深まったと考える方は、具体的にどのような点が深まったと思われるか、お書きください。深まったと思われる方は、三重大学（日本）／ハイデルベルク大学（ドイツ）についてどんなことについてもっと知りたいと思われましたか。できるだけ具体的にお書きください。</li><li>(3) 三重・ハイデルベルク大学の教員が新しく来たことで、これまでとやり方が違ったことはありますか。ある方は、どんなことだったか具体的にお書きください。</li><li>(4) (3) について、どう感じましたか。</li><li>(5) 事情をよく知らない教員と共に日々の授業をすることで、よかったと感じたことはありますか。</li><li>(6) 国際交流センター／ハイデルベルク大学の事情をよく知らない教員と共に日々の授業をすることで、困ったことややりにくいと感じたことはありましたか。</li><li>(7) 三重・ハイデルベルク大学からの教員の授業を見学する機会がありましたか。あった場合は、いかがでしたか。もし、なかった場合は、授業見学をすることについて、どう思いますか。</li><li>(8) 教員が交替したことで、担当の学生たちに、何らかの影響があったと思いますか。あると思われる方は、具体的にどんな影響があったと思いますか。</li><li>(9) これからの両大学における日本語教育に、どんな影響があると思いますか。</li><li>(10) その他、なにかお気づきになったこと、お感じになったことを自由にお書きください。</li></ol> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

本稿では、紙幅の都合により、いくつかの項目に限って記述することとする。まず、それぞれの教員とどの程度交流する機会があったかについて聞いたところ、ハイデルベルク大学教員と本学の非常勤講師との交流は週に15分～30分程度、多くても2時間程度であったのに対し、本学教員とハイデルベルク大学専任講師の交流は1日1時間程度と、かなりの差があった。これにはいくつかの理由が考えられる。まず、ハイデルベルク大学側は専任講師とのチームティーチングであったわけだが、専任講師であるために、基本的に研究日を除いて毎日出勤している。そのため、授業がなくても顔を合わせる機会が多い。さらに、専任教員は週に3日授業後に集まって引き継ぎを行うことになっているため、交流する機会が必然的に増えたと考えられる。

一方、三重大学では、表6からも分かるとおり、ほとんどの授業が個別であり、チームティーチングがほとんど行われていない。また、チームティーチングが行われている授業も、専任教員と非常勤講師によるものであり、非常勤講師は基本的に授業のある日にしか出勤しないため、交流が少なくなる。交流の時間が圧倒的に少なかったことが、その後のアンケート結果にも影響を及ぼしていると考えられる。

次に「教員との交流によって協定校やドイツ・日本の教育事情や制度などについての理解が深まったか」という質問については、深まったと答えた人とあまり深まらなかったと答えた人がいたが、深まったと答えた人は、「日本語授業の形態の違いが分かった」「大学の専門授業と日本語授業の関係が分かった」「研究費の制度や会議の多さについて知った」と答えた。また、深まらなかった人に対して、どのような点をもっと知りたかったのかを聞いたところ、「ドイツの大学のシラバスやカリキュラムについて」「ハイデルベルク大学の学生の日本語レベルと使用教材について」、「三重大学に留学したハイデルベルク大学の学生が三重大学でどのようなレベルのどんな授業を受けているのか」といったことが挙げられた。

また、事情をよく知らない教員と日々の授業を行うことでよかったと感じる点や、逆に困った点、やりにくい点はなかったかという問いに対しては、「さまざまなことを聞かれることによって、自身も知らないことを自覚し、質問に答えるために調べることになった」「違いを認識できてよかった」「新しいアイデアをもらうことも多く勉強になった」「思い切って新しいやり方を採用したり、これまで当たり前のように行っていたことをやめたりするきっかけになった」という意見があった。その一方で、事情を知っている教員が一人抜けることによって、残された専任教員の明文化されていない業務への負担の増加についても指摘があった。たとえば、ハイデルベルク大学では、交換プログラム実施時期に翌学期の時間割に関わる調整作業をする必要があったが、そのような業務が一人の教員に偏る

ということがあった。また、学生からの日頃の問い合わせや相談への対応など、これまでは分担して行ってきたものについても、一人でやることになったとのことであった。

#### 4.3. 交換プロジェクトを終えて

日ごろ慣れ親しんだ職場を半年間離れ、少し遠くから自分の所属する組織や学生のことなどを見つめなおすことができたことによって、これまで知らず知らずのうちに囚われていた固定観念を、ある程度払拭できたと感じている。また、自らを客観視できたことで、ある種ゆとりのようなものを感じることができるようになった。

三重大学側から見れば、協定大学の学生たちが三重大学に留学する前にどのようにして日本語を学んできたのか、またどのようなことを求めていたのかといったことについて、その一端を知ることができたし、ハイデルベルク大学から見れば、学生たちが留学先でどのような環境で、どのようにして日本語を学んでいるのかを知ることができた貴重な機会であったと言える。両校には、協定大学は数多くあり、本交換プロジェクトで体験し、知り得たことはごく限られた一部分に過ぎない。しかし、「受け入れ側」と「派遣側」という逆の立場に立つことができたことは非常に価値のあることだったと考えている。

以下では、教育面とシステム面において、交換教員が再認識した三重大学とハイデルベルク大学の日本語教育およびシステム面における気づきと学びについて述べていきたい。

##### 4.3.1. 教育面について

まず、当然のことながら、ドイツでは、自然な場面で必要に迫られて日本語を使用するような場面が普段ない。そのため、ハイデルベルク大学では、日本語を学ぶ学生と交換留学生を中心とする日本人との交流の場を提供する「日本語を話す会」を企画したり、学生主導のタンデム会を運営したりと、環境作りに苦勞している。一方、日本では一歩教室を出れば、あらゆる場において日本語に触れる機会がある。これは、教師交換を行う前から自明なことであったが、立場が変わることによって、日本にいるということが日本語を学ぶ者にとっていかに恵まれた環境であるかということを経験することとなった。今後、三重大学における日本語教育では、海外の大学では実現できない日本語教育についてより深く考えていくべきであると考えた。

次に、授業の方法についても、以下のような気づきがあった。たとえば、漢字の扱いである。三重大学における日本語学習者の母語はさまざまである。一般に漢字圏の学習者は非漢字圏の学習者より優位に立っており、クラスによってはそのためにレベル差がかなり大きくなる場合がある。漢字は語彙でもあるので、ハイデルベルク大学では漢字学習にか

なり力を入れているが、それは今後も変わらず続けていくべきだという認識を新たにすると同時に、その方法については再考の余地があると感じた。

#### 4.3.2. システム面について

三重大学では企画書と報告書の提出を伴った謝金の支払われるチューター制度があり、日本人学生が責任をもって留学生の日本語学習の支援に当たっている。ハイデルベルク大学では、こういったことはボランティアである。また、ハイデルベルク大学では、これまで、このようなボランティアの手配から日本人留学生に対する物品の貸し出しといった業務を行ってきた。このような業務には非常に時間が取られるため、学生自治会の力を借りるなどして教師主導ではなくこういった事務が円滑に行えるようにシステムの見直しをしていきたいと考えた。

次に、表1でも触れたとおり、三重大学教員はドイツで学期中に2度日本学科のスタッフ会議に出席する機会を得た。これは、ドイツ語で行われるものであり、学科長をはじめとする全教員、司書、秘書のほか、学生代表も出席していた。会議は、授業のことから学科運営のことまで情報を共有し意思疎通を図り問題解決のための意見交換をする場となっていた。学生代表は、人事権の一部を持っており、どのような先生の講義を受けたいのかという学生目から教授の選抜にも参加することができることになっている。つまり、学生は単に教育を受けるだけの受身の存在ではなく、コースを一緒に作り上げていく存在であるということを感じた。

#### 5. 今後の展望

これまでは、協定校との学生交流や学術交流にとどまることが多く、このような半年にも及ぶ日本語教育の交流が行われることはなかった。本教師交換プロジェクトにより、これまでに学生を通して、または書籍物等を通してしか知り得なかった協定大学の日本語教育事情について、実際に教員として働きながら体験することで得られたものは計り知れない。このようにして、留学生の受け入れ側と送り手側のつながりの大切さについては、田村・ウンケル(2017)でも述べられている。

田村・ウンケル(2017)は、教育機関を超えたカリキュラムの連続性という課題がドイツでも注目され始めていると指摘する。高等教育で問題になるものとして「留学前と留学後の日本語コースの連続性」や「留学中取得した日本語コースの単位の取り扱い」を挙げている。留学前と留学後のコースの連続性の問題は、送り出し校と受け入れ校の教育目標にずれがあって、習得分野別に見ると接続が機能しないことであるとしている。その一つ

の例として、送り出し校では手書きによって漢字を習得させることに重点が置かれていたが、受け入れ校では書けることより漢字の理解が重要視されていたため、留学後、漢字を書く能力が落ちてしまったというケースが挙げられていた。これなどは、まさに筆者らも実際に経験したことである。しかし、このような齟齬を避ける方法があるだろうか。日本に留学する学生の数は年々増加の一途をたどる。その留学生の出身大学別ニーズにこたえることは簡単ではない。しかし、たとえば教師交換で派遣元の大学の実情を体験的に知ることや、交換相手の日本語教師からフィードバックを得ること、留学生へのインタビュー調査を行ってある傾向をつかむことは、可能なはずである。

今回の教師交換プログラムをきっかけに両大学の日本語教育担当者同士の交流が生まれ、授業をはじめ、同僚や学生との対話を通してさまざまな気づきを得られた。これからもお互いの持つ知識や経験を共有し、それぞれの現場に合った日本語教育のあり方を共に模索していける強力なパートナーとなることができれば幸いである。

最後に、2017 年度にも交換事業が行われることが決定している<sup>5</sup>。次回は、今回交換事業を経験した筆者らが同じ職場で働くことになる。今回の経験を教育現場での実践に生かしていけたらと考えている。

## 謝辞

今回このような経験ができたのは、ひとえに両大学の関係者各位のご理解とご協力のおかげである。みなさまにこの場を借りて心からお礼を申し上げたい。

## 参考文献

- 国立大学法人三重大学 (2016) 「三重大学国際交流年報 2015」
- 澤田田津子 (2010) 「日本語・日本文化研修留学生プログラムの改善について」『奈良教育大学紀要 (人文・社会)』 vol.59、No.1 (Cult. & Soc.)、pp.71-83.
- 田村直子・ウンケル、モニカ (2017) 「ドイツ語圏の日本語教育におけるカリキュラムの連続性 中等教育期間と高等教育機関のアーティキュレーションー日本への留学を含めてー」ドイツ語圏大学日本語教育研究会 (編) 『Japanisch als Fremdsprache』 vol. 5、印刷中 (3 月 10 日現在)
- 中広美江・高橋雪絵・加藤由実子 (2017) 「ハイデルベルク大学日本学科における自主制作教科書の改訂と課題」ドイツ語圏大学日本語教育研究会 (編) 『Japanisch als Fremdsprache』 vol. 5、印刷中 (3 月 10 日現在)
- ヨーロッパ日本語教師会編 (2010) 『ヨーロッパにおける日本語教育事情と Common European Framework of Reference for Languages』国際交流基金
- 三重大学国際交流センター (2016) 「三重大学授業案内 2016」
- 文部科学省「留学生 30 万人計画」の策定について 2008 年 7 月 29 日

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/07/08080109.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.html)

#### 脚注

- 1 ここでは、日本と対応させて便宜的に「年度」という表現を用いている。1年度は10月から翌年の9月までである。
- 2 冬学期は10月～翌年3月、夏学期は3月～9月であり、新入生は冬学期に入学する。
- 3 日本の交流協定大学は15校あり、そのうち11校に日本学専攻（75%、50%）の学生を派遣している。
- 4 三重大学国際交流センター専任教員からの寄稿による。
- 5 2016年11月に三重大学内で公募を行ない、2017年度の交換教員を決定した。